



DXの進め方でお悩みのご担当者さまへ

DX推進指標を 駆使し 新たな時代のトップ企業へ

ビジネスの現場では、競争力維持・強化のために、DX（デジタルトランスフォーメーション）をスピーディーに進めていくことが求められています。

「DX推進指標」は、各企業が簡単な自己診断を行うことで、DXの進捗や課題を明らかにし、アクションに繋げるツール。今回はその活用のポイントや取り組み事例をご紹介します。

こんなことにお困りではないですか？

社長が変革の
必要性を理解できず、
始まらない

進んでいるが、
やっていることが正しいか
わからない

何から始めたら
いいかわからない

どこまで進んで
いるかわからない



多くの企業がDX推進指標で変革を実現しています。
ぜひ、活用してみませんか？

DX推進指標とは



DX推進指標は、経営やITなどの観点で構成される自己診断ツールです。
DXの実現に必要な項目を網羅しているため、自己診断項目に回答することで、
DX推進に向けた自社の課題や、次に実施すべきアクションがわかります。

DX推進指標のメリット



認識共有

自社のDXができているのか？できていないのか？

関係者が集まって議論することで、認識の共有ができます。



アクション

DXの推進に向けて何をしたらよいか？

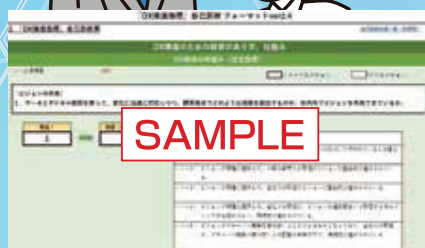
次のアクションへの議論を行うことで、実際のアクションにつなげられます。



進捗の把握

去年に比べて自社のDXは進んだか？

毎年診断を行うことで、自社のDXの取り組みの進捗管理ができます。

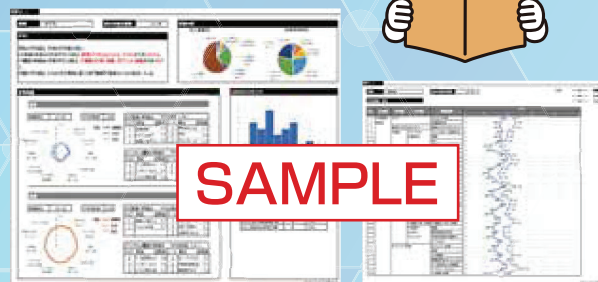


**DX推進指標は、全社を一丸にし、
変革を加速させ、強靱な企業を実現します。**

Excelのフォーマットを使用して、各項目をレベル0からレベル5の6段階で自己診断していきます。レベル0はDXの取り組みに未着手、レベル5はグローバル競争を勝ち抜くことができる日本でも有数のDX先行企業です。

DX推進指標の活用ポイント

自己診断結果をIPAに提出すると、他社のDX取り組み状況と自社の取り組み状況を比較できる「ベンチマークレポート」がもらえます。
全国での位置づけ、業界内での位置づけ、DX先行企業との比較ができます。DX推進における自社の立ち位置を知りましょう。



「ベンチマークレポート」は、改善すべき具体的な点を明らかにするのに役立ちます。



INTERVIEW

DX推進指標はDXの「健康診断」

DXビジョン「Digital Fusion デジタルの力で、あらゆる境界を取り除く」を掲げ、グループ会社を含めた共通のフレームワークとしてDXに取んでいる東急不動産ホールディングス。グループCX・イノベーション推進部デジタル戦略グループのお2人に、DXの取り組みとDX推進指標の活用について語っていただきました。



東急不動産ホールディングス

小林香穂
グループCX・イノベーション
推進部 デジタル戦略 グループ

鳥巢弘行
グループCX・イノベーション
推進部 デジタル戦略 グループリーダー

——2020年からDXの取り組みを開始していますが、最初はどこから着手しましたか。

鳥巢：最初の課題は「社内の意識改革」だと感じていました。いま振り返ると、DXの必要性についての理解醸成と意識を合わせてグループ全体の足並みをそろえていくことに、すごく苦労したことを思い出します。
また、DXによる成果を定量的に伝えることの難しさも感じました。このときに、とても役立ったのが「DX推進指標」です。関係者にヒアリングして情報を集めDX推進指標の自己診断を行いながら「どこから始めればよいのか?」、「次は何をしたらよいのか?」を決めていくことができました。

小林：DX推進指標は、定期的かつ客観的な評価を行えることが大きなメリットです。たとえば、1年に1度、健康診断のように自己診断を行うと「1年前からどのくらいDXを進めることができたのか」を全体的に把握することができます。

鳥巢：DX推進指標の活用は、DX認定の取得がきっかけでした。DX認定によって「デジタルによって自社のビジネスを変革する準備ができている状態」と国に認定されることで、社内外にDXをアピールすることができます。

小林：ベンチマークレポートも、自分たちの立ち位置や自社と他社との差異を把握することができ、DXの取り組みに役立つとともに、私たちの刺激にもなっています。

——DXを推進していくうえでのポイントや目標などについてお聞かせください。

鳥巢：DXを推進する人財の育成と確保も重要です。2022年には、当グループのDX機能会社として、TFHD digitalを設立しました。同社では、外部からデジタル人財を獲得するとともに、その力を活用してグループ各社のDX推進を支援しています。

小林：グループ各社の連携のもと、重点課題と注力領域におけるDXを推進することで、将来的な収益貢献へと繋げ、独自性のある価値創造へと高めていきます。

詳細なインタビューは、こちらのリンクからご覧いただけます。

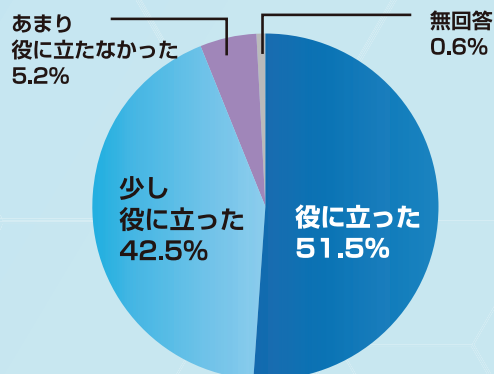
DX SQUARE : <https://dx.ipa.go.jp/interview-tokyu-fudosan-hd>



97%が DX推進に役に立ったと回答

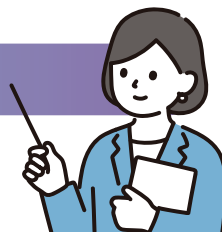
アンケートによると、97%の企業が「DX推進指標が役に立った」と答えています。また、DX推進指標の自己診断によって、自社のDX推進の課題に対する気づきとなったと回答した企業は94%にもなります。年1回のDX推進指標による自己診断で持続的なDXの実行に繋がっていきましょう。

Q.DX推進指標による自己診断は自社のDX推進状況を把握する上で役に立ちましたか？



DX 推進指標 利用者アンケートより

DX推進指標の活用の流れ-モデルケース



STEP 1

自己診断する

自己診断について、現在と3年後の目標レベルを記入します。この際、設定したレベルの根拠と目標達成のために必要なアクションも記入しましょう。

経営幹部・事業部門・IT部門などのDX推進における関係者で話し合うのが有効です。

STEP 2

提出する

「DX推進ポータル」で自己診断結果を提出しましょう。毎年診断を行うことで、自社のDXの取り組みの進捗管理ができます。

提出したExcelファイルは後で見返すために保管しておきましょう。

STEP 3

「ベンチマークレポート」で自社の立ち位置を知る

自社のDX推進状況について他社と比較しましょう。自社の強みと弱みを明らかにして、必要な取り組みを考えましょう。

「ベンチマークレポート」も経営層と確認することがポイントです。

DX推進に向けて動き出そう

どんどん取り組みを進めていきましょう。
診断とアクションを繰り返すことがトップ企業への近道です。

DX推進指標の解説動画配信中



DX推進指標についての詳細はこちら

DX推進指標



本件に関するお問い合わせ先